

主 題：達人

聖書箇所：テモテへの手紙第二 2章15節

私たちがだれかにプレゼントをしようとするとき、どんなものがいちばんいいか、どんなものが喜ばれるだろうといういろいろ思案をします。特に、プレゼントする相手が大切な人であるほど一生懸命考えて選ぶとします。もし、私たちが神にプレゼントできるとするならば、いったいどのようなものをささげるでしょうか？神が喜んで受け入れてくださるようにと願って心からささげるのではないのでしょうか？カインとアベルの例があります。カインのささげものは神に受け入れられませんでした。もし、そのようなことになったらどうしよう…と思います。では、神はどのようなものを受け入れてくださるのでしょうか？神は何を喜ばれるのでしょうか？私たちが本当に神を愛するならばそのことを知りたいと思うはずで

す。パウロはテモテにこのような励ましとことばを与えました。今日のみことばの箇所です。Ⅱテモテ2：15「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」と、パウロはこのようにテモテに書き送りました。テモテがいたエペソの教会には偽の教師がたくさんいました。多くの間違っただけの教えが広まっていたのです。ゆえに、パウロはまだ年も若く経験も浅かったテモテに対してこのようなことばを与えたのです。今日は、この箇所から神がクリスチャンに対して望んでおられるささげもの、また、ささげることについて学んで行きます。それによって、皆さんお一人ひとりが神に受け入れられるささげものをする人になっていただきたいと思

います。この箇所から三つのことを見て行きます。

☆神が喜んで受け入れてくださるささげものとは？

1. 自分自身を神にささげること

これは言い換えれば、毎日、いつも神を崇めて歩むということです。15節の最後の部分に「自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」とあります。今、愛する神にささげものをして、あなたは何を思い浮かべますか？ある人はたくさんものを思ったかもしれませんが、ある人は何をささげたいのだろうか考えるかもしれません。たとえば、私たちは神から様々な物質的な恵みを日々与えられています。それゆえに、私たちは献金として神にささげものをするすることができます。また、先日、JOYJOY5DAYS（子どもの集会）が行なわれましたが、そこに多くの人たちが奉仕に加わったことを聞いていますが、そのように、自分のもっている力、能力を神にささげることでもできます。また、そのように力をささげるとき、同時に、それは時間をささげることでもあります。つまり、ここに来て神のために働く、神に自分の力、時間をささげることができるのです。また、直接奉仕に関わなくても、祈りをもっていろいろな働きを支えることができます。それも時間をささげて祈っているわけですね。このように神に何かをささげること考えたとき、お金、自分の力や能力、時間などをささげることができるのです。そこで、私たちが考えなければいけないことがあります。「自分を神にささげるよう」と言われています。ここで「ささげる」ということばは「そばに立つ、だれかのもとに来る、近寄る」という意味をもったことばです。つまり、神のそばに立つ、神のもとに来るといえるのです。ささげることとは私たち一人ひとりが神の御前に行くことなのです。コロサイ1：22を見てください。救われた人に対してパウロはこのように言っています。「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」「御前に立たせてくださる」、これが今見ている「ささげる」と同じことばです。つまり、自分をささげるとは自分自身が神の前に行くことだと言

うのです。また、ささげものをするとき、すなわち、神のために働くとき、奉仕をするとき、私たちの心はどこにあるのでしょうか？からだは確かにそのところにありますが、心はその場に伴っているのでしょうか？本当に心から喜んでその働きをしているかどうか、私たちはそのささげものといっしょに私たち自身の心も神の前に出て行っているのでしょうか？ただ物だけをささげているということはないのでしょうか？確かに、私たちは神を見ることができませんが、神は今もここにおられます。そのような神にささげるとき私たちは「自分を神にささげる」のです。それが神が望んでおられることです。ローマ6：13を見てください。「また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」とあります。私たちがささげるもの、それは「…その手足」、私たちの行ない行為である以上に、「あなたがた自身と」とあるように、先ず、私たち自身が神の前に出ているか、そのことが問われているのです。皆さんもよくご存じのみことばです

が、ローマ12：1「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」、神が望んでおられることはこの通りであると教えられているのです。ささげものをするとき、自分の一部分だけをささげればいいのでしょうか？もし、皆さんがただ献金をする、ただ奉仕をする、時間をとって祈ると、それだけでは神に受け入れられないこともある、神はそれを喜ばれないこともあるのです。確かに、あの人は熱心に働いている、いろいろなものをささげているとそうに見えても、それが本当に神に受け入れられているかどうか、そのカギとなるのが「自分自身をささげる」こと、自分が神の御前に出て行くことです。つまり、日々神を崇めることです。いついかなるときも神を称え崇めること、それが「自分を神にささげる」ことなのです。

たとえば、皆さんは月曜日から土曜日までどのような生活をしておられますか？ある人は神と全く関係ないような生活をして、日曜日だけ教会に来ているかもしれません。また、奉仕するときだけ教会に来ているかもしれません。それでは神に喜ばれるのでしょうか？神が言われることは、先ず、自分をささげること、つまり、日々、神を崇め続けなさい、その上で様々なささげものをする、奉仕をしなさい、そのとき、私たちがささげるものを神は受け入れてくださると言うのです。でも、人間は弱者です。つい目に見えるものに心奪われて、これだけささげたから安心、これだけ奉仕をしたから十分だと思ってしまうかもしれません。そうであってははいけません。だから、パウロはテモテに言いました。「**努め励みなさい。**」、努力しなさいと。愚かな弱い私たちですから、絶えず、自分を神にささげようと努力しなさい、それが必要だと言います。ペテロもこのように言っています。Ⅱペテロ3：14「**そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。**」と。日々、神を崇めて過ごしているなら、その人はどんなときにも平安をもって神の御前に出ることができる、そのように努め励みなさいとペテロも教えるのです。

まず、私たちがささげものをするとき、神が望んでおられることは自分自身をささげることです。では、自分自身をささげるならどうということでもいいのかというと、決してそうではありません。

2. 神に認められる者としてささげること

言い換えるなら、自己中心であるならたとえそれが熱心な思いであっても受け入れられませんということ。テモテに対してパウロはこのように呼びかけました。「**あなたは熟練した者…**」と、これは物事に慣れて非常に巧みである、いろいろなことを知っていてそれを上手にできる人、それが私たちが考える「**熟練した者**」ということばの意味ですが、ここで教えている意味は「試験済みの、本物と保証された、認められた」ということです。つまり、神に試験されて良しと認められた者ということができるのです。ただ物事をよく知っていてそれを巧みにできるというだけでなく、神が認めてくださった者であると言うのです。神に認められるために何が必要なのか、当然、それはキリストを信じ受け入れることです。救われていることが必要なのです。キリストを個人的な救い主として信じていなければなりません。では、救われているから何をしてもいいのか、神のためなら何をしてもいいのでしょうか？答えは「いいえ」です。神は決して罪を受け入れられない方です。神は完全に聖い方ですから罪、悪を受け入れることはありません。たとえ、神のためだと思ってやっても神には受け入れられないことがあるのです。それが先ほど言った自己中心的であるということ。たとえば、あるところで奉仕をするとして、確かに、いろいろな人が集まるといろいろな意見や考えが出て来ますが、そのとき、あなたが一人だけ皆と違う意見をもっていたらあなたはどうされるでしょう？素直に皆の意見に従うでしょうか？それとも、いや、これは自分が神のために考えたことだからと言って、他の人を無視して、他の人の意見に耳を傾けようとしないでやってしまうのでしょうか？それは神に受け入れられることでしょうか？確かに、その人は熱心に神のために働きをしようとするのかもしれませんが、全く、他の人のことを受け入れようとしないなら、神は受け入れてくださりません。また、他の人と意見が違ったとき、それに合わせようとして、確かに、行為では他の人と同じようにしているかもしれませんが、もし、その心の中に「どうしてこんなことをしなければいけないのか」と不平や不満をもっているなら、それは決して神は受け入れられません。神に受け入れられるささげものをするべきだとパウロは教えるのです。

ここで「**熟練した**」と書かれていることばですが、Ⅱコリント10：18に同じことばが使われています。「**自分で自分を推薦する人でなく、主に推薦される人こそ、受け入れられる人です。**」、この「**推薦される**」ということばが「**熟練した**」と同じことばなのです。つまり、受け入れられる人、それは自分勝手なことをする人ではなく神が推薦される人、神が認めてくださる人だと言うのです。また、ローマ14：18にはこのように記されています。「**このようにキリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人々にも認められるのです。**」と、この「**認められる**」が先ほどの「**熟練した**」と同じことばです。つまり、キリストに仕える人、キリストを信じキリストに従おうとする人を神は喜ばれ、そして、周囲の人々にも受け入れられる、認められるとパウロは記しているのです。「**熟練した者**」、それは神に認められるとともに、あることにも

熟練した者であることを教えています。それはみことばを本当によく知っている人、そして、知っているだけでなく、みことばをしっかりと用いることができる人であるということです。そのような人が神に認められる人だと言うのです。そのことが最後に教えられています。

3. みことばに忠実な働きをささげること

言い換えるなら、神に忠実な働きをするとき神はそれを受け入れてくださる、神はそのことを望んでおられるということです。「すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることの無い働き人として、」神はみことばに忠実な働きを望んでおられるのです。「恥じることの無い働き人として」と記されています。これはどのような人のことでしょうか？人に自慢できるような働き人になることでしょうか？周囲の人々から「やあ、立派な働きをする人だね！」と言われるようになることを教えているのでしょうか？また、人から見られて恥ずかしいような小さな働きはしなくてもいいのだと言われているのでしょうか？決してそうではありません。ここでは、どのような働きであってその働きを忠実にこなすかどうかということが問われているのです。働きの大きい小さい、また、重要であるか重要でないか、そういうことではなく、与えられている働きに対して忠実さがあるかどうかということをパウロは教えているのです。教会にあってすべての人が同じ働きをするならどうなるでしょうか？働きはいろいろあるわけで、皆さん一人ひとりには異なった賜物が与えられているのです。パウロはこのようにも言っています。Iコリント12:7「しかし、みな**の益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。**」、それぞれ違う賜物が与えられていると。大切なことはその与えられている賜物を用いているかどうかです。自分に与えられたものを忠実に用いているかどうか、自分に与えられたものを忠実に働いているかどうかです。

マタイの福音書25章にタラントのたとえがあります。主人が三人のしもべに能力に応じてある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを渡して旅に出ました。タラント、すなわち、お金ですが、何のために渡したのでしょうか？飲み食いするためではありません。しもべにお金を託したのはそれを用いて働きなさいと言って渡したのです。面白いことに、みことばを見ると「**おのおのその能力に応じて、**」と書かれています。つまり、その人に合ったものを神が与えてくださっているのです。そして、長い時間が経って主人がしもべのところに戻ってきたときどのようなことがあったのでしょうか？25:20「すると、**五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』**」と、そのしもべに対して主人はこのように言います。21節「『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」と。そして、また二タラント預かった者が主人のところに来て言います。22-23節「『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』:23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」、聖書を開けて見比べて見てください。五タラントの者と二タラントの者に対して主人はまったく同じことばを使っています。つまり、五タラントもうけたから忠実だった、二タラントもうけた、頑張ったなどいうのではないのです。与えられたものに対して忠実であったから主人はより多くのものを任せよう、そして、ともに喜ぼうと同じように言っています。たくさんもうけたからたくさん褒められるというわけではありません。与えられたものに対してどれだけ忠実に働いたか、そして、その働いた者に対して同じように神は褒めてくださると言います。では、一タラント預かった者はどうだったでしょうか？彼は何もしないで地の中に隠しておいただけでした。その者に対して主人はこう言います。「『**悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。:27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。:28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』:29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。」(25:26-29)。どうでしょうか？忠実でないなら与えられているものすら取り上げられることになると言います。でも、うれしいことは神が何を見ておられるのかです。どんなことをしたかではなく、本当に忠実に神の働きをしたかどうか、そのことだけを神はしっかり見ておられるのです。つまり、忠実に働きそれを神にささげるなら神はそれを受け入れてくださるということです。**

そして、その働きの基盤は何にあるのでしょうか？みことばはこのように言います。「**真理のみことばをまっすぐに説き明かす**」と記されています。なぜ、このように言われているのでしょうか？冒頭でも言いましたが、この時、たくさんの偽教師たちがいたのです。それゆえに、あなたはしっかりとみことばに立って歩まなければいけない、みことばをしっかりと語らなければいけないと、そのことをパウロは教会の指導者であったテモテに教えるのです。では、ここで言う「**真理のみことば**」とは何でしょうか？パウロは別

の箇所をこれを福音に当てて記しています。エペソ 1 : 13 やコロサイ 1 : 5 などでは、真理のことばを福音として記しています。エペソ 1 : 13 「**またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。**」、コロサイ 1 : 13 「**それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。**」。真理のことば、それは人に救いを与えるものであり、真理であるゆえに、うそ偽りのないまさしく真実のことば、それは聖書のみことばであるのです。そして、そのみことばを「**まっすぐに説き明かす**」とあります。説き明かすためにはまず、しっかりそれを知らなければなりません。それゆえに、説き明かす者はしっかりみことばに規範を置いて歩まなければいけません。そして、ここに「**まっすぐに説き明かす**」と書かれていることばですが、そのもともとの意味は「**まっすぐに切る、規則に従って正しく切る**」ということでした。つまり、本当に正しくみことばを宣べ伝えるということをこのことばによって示そうとしているのです。そのために、私たちはしっかりみことばを知っていなければいけません。そして、このことばは新約聖書ではここだけにしか使われていないのですが、旧約聖書のギリシャ語訳ではこのことばが二箇所に使われています。箴言 3 : 6 ではこのように記されています。「**あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。**」、また、同じ箴言 11 : 5 では「**潔白な人の道は、その正しさによって平らにされ、悪者は、その悪事によって倒れる。**」とあります。ここで使われている「**まっすぐにされる**」と「**平らにされ**」が「**まっすぐに説き明かす**」ということばなのです。つまり、みことばを「**まっすぐに説き明かす**」なら、ただ語るだけでなくその人の歩みにそのことがしっかり現われてくる、それゆえに、その道がまっすぐにされる、歩みが平らにされるとみことばは教えているのです。みことばに、また、神に忠実な恥じることのない働きを神にささげること、そのことを神は望んでおられるのです。

皆さんは、今まで神が望んでおられるささげものをささげておられましたか？いろいろなささげものをして来られたでしょうが、それらは本当に神は受け入れてくださっていると思われませんか？神はこのようにことを望んでおられると、このように三つのことを見て来ました。ぜひ望むことは、ここにおられる皆さんお一人ひとりが、日々、神に受け入れられるものをささげる者へと変わって行ってくれることです。